

フォレストニュース

植林が地球を救う
平成25年(2013)6月10日
No. 66
発行 高津啓洋

パラグアイ大統領ニームを植樹

パラグアイ共和国フロンコ大統領がレダを訪ねたのは、5月3日です。快晴の元、政府主催のパク稚魚放流式が行われました。また大統領が、チャコ地方として、



産業もなく、植林も困難な地域に、当会が緑化に成功し、様々な、野鳥や小動物が戻ってきて、生態系の維持に貢献しているとして、興味を抱いた地への訪問となりました。大統領は、植樹地周辺を視察し、最後にニームの木を記念植樹しました。

津波防潮堤植樹会と三陸被災地慰霊の旅

大震災から2年3ヶ月目の5月18日、岩手県大槌町浄化センター敷地で、400人による5000本植樹が行われました。

当日は緑の会10人の会員と関係者の皆さんと共に、初夏の穏やかな陽ざしの中、汗を流し土にまみれながら、大津波から命を守る



「緑の防潮堤」となる木を夢中になって植えました。その土地本来の樹種タブノキやシラカシなど15種類、樹高30～50cmのポット苗を一人平均10数本は植えたと思います。

木の成長は普通“ワンイヤー・ワンメーター”といわれ、15年たつと樹高15～20mの、高木・亜高木・低木・下草の多層群落の濃密な森が緑の壁として形成されます。この森が大津波のエネルギーを吸収し、人の命を守るとともに美しい景観をつくってくれるのです。コンクリートの防潮堤のように劣化せず、しかもはるかに安いコストでできます。各樹木は世代交代をくりかえしながら森全体としては次の氷河期がくる9000年まで持続します。

したがって、この緑の防潮堤が完成してはじめて本格的な市街地の復興が可能となるわけです。

震災がれきをゴミ扱いせず、樹

木を育てる植栽マウンドに使っての防潮堤づくりは「宮脇方式」と呼ばれ、当時の加藤町長以下40名のベテラン職員を失った大槌町が二度と大惨事をくりかえさないようにと、“植樹の神様”宮脇昭先生の指導と(株)横浜ゴムの支援



によって日本で初めて着手した“生きた材料を使ったハイテク”プロジェクトです。

気仙沼から大槌町に至る車窓から間近に見てみると、三陸海岸のリアス

式状の湾ごとに発達した市街地は、ほとんどが街ごとなくなっていて今なお更地状態のままです。震災直後から、「被災地の人々のために自分も何かできないだろうか!？」

「復興のため少しでも役立ちたい!」と機会を待っていた方々が、東京から、関西から駆けつけて5000本植樹は1時間半以内にあっという間に完了し、昨年の3000本と合わせて8000本の木が海沿いに育つことになりました。(報告:高津代表)